亞爾然丁時報

附錄文藝

MARZO 1931

第四拾四号

第六卷

Año VI . NO. XLIII

リヨベット船長

（續き）

ブラスコ・イバーニエス作
粹庵譯

雨のじと〳〵と降る或る朝のこと彼は人々が海岸へ向つて走つて行くのを見た。すると彼は家族のものがリユーマチスに悪るいからと云つて止めるのも聞がずに出掛けるのである。

岸へ引上げた黒い船々の間から見へる白波に厳はれた青い海の上には男達の青色のブルーサや、両よけをして居る女達の裾が海風に吹き上げられてゆれて居るのが見へた。

彼方の水平線をとざす霧の中を綾つがの漁船が水に濡れて薄黒く見へる帆を殆んど畳んで物に驚いた羊の如く走つて居た。怒り狂ふ海の膿汁のやうな黄色い泡の湧きたつた波に赤く塗られたとも見へる帯赤色の絶壁からなり立つた港の端を曲るに際し船は跳躍する毎に龍骨を露はし乍ら怖ろしい闘争を續けてゐる。

檣を折られた一艘の船が球の如くに波から波へと轉つて、あの物凄い絶壁に向つて進んで居たのである。岸ではムマが差し迫つて来る死に失神して甲板に横たはつて居る乗組員を見て声をかぎりに呼ぶのであつた。彼等は船の綱を行つてロープを投げかけ岸まで引つぱつて来やうと云ふのであつた。

けれどいざとなると最も大膽だと云ふ男共迄が怖ろしい勢で寄せては砕け、水沫を空間に満たすあの波を見ると怖れを抱いて口を閉じてしまつた。もしその中を出やうとする船があつたならば一本の櫂をも動かさないうちに引つくり返つたであらう。

『さあ、俺と一緒に来る者があるか！あの可哀想な奴等を救はなくつちやならん。』

それはリヨベット船長の荒い命令的な声であつた。彼は眼を凄く輝かし、手を拡にぶる〳〵と震はせ乍ら不自由な脚を踏張つて立つた。女達は驚いて彼を眺めた。彼の周りに集つて居た男共は彼があたりのものを撲り殺はさんとするかのやうに手を振り乍ら怒鳴りつけた時、あとずさりをした。

彼はその人々が沈黙を保つて居るのを見ると顔を従を拒んだ乗組員の前に立つたやうに憤怒とした

のである。

『一体何時から俺の村に俺に従つて海に出やうと云ふ男が居ふくなつたのだ！』

彼は竟に逃はれた暴君の如く、また信者の逃げ行くのを見る神の如く疾呼し乍ら云つた。しかもそれを純粋の西班牙語で云つたのは彼が憤激の極に達した時の標しである。

『参りやせう、船長！』と二三の震へ声が同時に叫んだ。

と五人の老人が人を押し除けて眞中に進み出た。何れもリヨベット船長の昔の乗組員であつて、

海の嵐とに肉を食ひ取られた五つの骸骨である。

彼等は昔からの服従心と一緒に危険を冒した親しみから動かされたのである。或る者は足を引きづり乍ら出た。又他の者は鳥の様に躍り出た。或る者は瞳に老眼の朦朧さを示すもの、如く眼をいやに開いてゐた。何れも身に黄色い厚フランネルの衣を纏ひたゝんだ手布で頭を巻いた上に頭巾を戴いて寒さに震へてゐた。それは恰も偶像と一緒に死ふうとする古い番人であつた。

と群集の中から女や小供達が出て来て、彼等を止めやうとしてしがみ着くのであつた。

『御祖父さん！』と孫達は叫んだ。

『御父つさん！』と娘共は喚いた。

すると元気のい、老人共は戦の喇叭の音を聞く半死半生の老馬のやうにそり返つて彼等の首や腕に掴まる腕を押し拂つて居た。そして船長の声に答へて叫ぶのであつた。

『参りやせう、船長！』

老水夫達は彼等の偶像を眞先に立て一艘の船を水に降ろすために道を開いた。彼等は努力に充血して眞赤になり、忽に首のあたりを膨らませやつとのことで船を動かし数歩ばかり滑らかす事を得た。自らの老耄に躍起とふり新しい努力を試みた。併し群集はその暴挙に反対して彼等にひし寄せたのである。そして家族のものに依つて遮二無二引つ張られてゐつた。

『止せつたら、卑怯者共め！俺に觸る奴等は殺しちまふぞ！』とリヨベツト船長は呻つて居た。でも彼を愛してゐる村人は其の時こそ始めて彼に手かけたのであつた。彼の言ふこともきかないで、また彼の暴言にも頓着せずに氣狂のやうに縛り上げてしまつた。

救助から見捨てられた船は怒濤の上をのたうち廻りながら死へ向つて走つてゐた。もはや絶壁の間ぎわまで来て、今にも湧き立つ泡の渦巻の中に粉砕して了はうとしてゐた。そして斯くも人間の生命を軽んじ、部落中の五人を犠の餌にして何か物凄い物語りのやうに氣味の悪い名称を與へられてゐるあの老船長は多勢の手に抱き止められた儘狂ひ廻つた。そしてあの未知の人達を救助するために自分の生命を賭させて呉れと怒鳴つた。それから遂に彼の抵抗力もつき果て小供のやうに泣いてゐた。

（完）

—一九三一・三・二五—

男・女

△女は自分の恋を決して語らうとはしない。どんな恋をされたか、それだけを話したがる。

△或る女の語彙(ボキャブラリー)で彼女の恋人がどんな男か大体想像できる。

△相談と云ふのは告白以外の何物でもない。

詩と歌

折にふれ

みのる

女にサッパリしてゐると云はれて寂し
悪を捨てたわれは。

たゞ一人ダイヤ掘らむとて旅立ちし
友思へば心うずく。

われ流浪の旅に出でしより幾年が
指をりて見て淋しくなりぬ。

マリリアに来て金もなく友もなく、
流浪の旅がいやになりたり。

興覚ゆれば涙流し声張り上げて叫ぶ
吾を友は不思議と只みつめたり。

日記 うぼはれ～夕べ声たて、泣けり
日記はわが悪人にしあれば。

——一九三一・FEB——

思ふまい

世渡須知庵

みんな夢です
昔です
護守の夜の
逢ふ瀬ごと……

思ひ出すまい
ふれますまい
泣いて別れた
あの事も……。

私は見た彼女を

蘇南

私は見た彼女を
はちきれそうな顔して
ニッコリ頬一ぱいに笑ってた。

私は見た彼女を
高台で楽器を奏でながら
軽いいやなキッスを投げてた。

私は見た彼女を
怪しげなカフェーで
クリストの本を賣歩いてた。

私は見た
人ごうに涙を流して
ゆき去つてゆくらホ……と笑つてた。

私は見た彼の女を
外頬
姿にかくれ白粉を着物塗つて
ゲ下がで光つてた。

私は見た彼女を
頬青
して茶に湯とかけたような
鈴姿の前にたつてた。

私は見た彼女を
頬雑
しゃ帝と電車はずしてくれつてゆ
皮にゆまつてた。

私は見た彼の女を
悪暗
人と秋いと甘い哀さを流してた。

私は見た彼の女を
着物
れ夏行けば四頬皿を眺めてた。

私は見た彼の女を
買こんぶは
漬載ぶんぶ物と和流行つてよ
だつてた。

秋の訪れ

冨見子

夏病みて
心痛みぬやがて来ん秋を何に慰さん。

この涙見せじと仰く大空の
あはきとよがる雲のあるかな。

我が行かは君の姿のあやしとて
異人の子等はは手打はやしぬ。

いまごとの人に知らさず
守おほせてこの秋に入る。

何時しか
君も悲しき秋の訪れて
人とはなりぬ。

秋ふれば
君に洪しき秋ふれば
たはりを看ずて暮さん。

美女禮讃

(二)

美都三

眼は口以上にものを云ふ。

こゝに於て御婦人方はどうしても、この眼を顔の造作中で一番引き立たせるべく痛感した――と云ふ処から、眼の縁に細工を初めたんだ。

女優や踊子達、乃至或る種の女性が、眼の縁を濃い緑色で隈取るのもこの爲めであらう。勿論、この他に、顔全体から見た色彩の調和とか、眼を大きく見せる爲とか、種々ふ理由もあらうが、終局の目的は矢張り「眼を一番引き立たせる爲め」といふに他ならぬと私は思ふ。

赤い唇に緑色の眼隈――御承知の通り、赤と緑は補色の関係で、恐ろしく華美ふ配色ふのだが、その間を白色或は肉色に輝く頬の肌で中和させた素晴らしい色調の美は、如何ふる石部金吉をもトロリとさせねは置かないであらう。然しお気の毒ふことには、この素晴しい化粧法も、現代の先端的女性に依つて新しく発見されたものでない事、恰も前項に於ける「口紅」の如くである。

由來最近の女性はどうも頭が悪るくて、創造性に乏しい。――お怒りになつては困ります。今日は大分下火になつた様だが、例の断髪――欧洲大戦中、露国婦人に依つて創作？せられたと称する断髪――あれなんかも、今更、事新しく論ずるまでもなく、既に紀元前二八〇〇年頃に於ける埃及のモダン・ガール達が勇敢に断行してゐたものなんである。

決して私の臭太ではふい。御不審の方は、現在カイロ博物館に陳列されてゐるノフリト女王の彫像を御覧下さい。房々とした毛髪を首のあたりで切り揃へた断髪。「ふンダ、それじゃ初期断髪程度のもんじゃないか」と云ふなかれ。これも、実は髪であつて、それを除けば下は天晴れウルトラ・モダンなシングルカットふんだから驚く。

その証拠は紀元前一三六〇年代の若い姫君の首が、今でも残つてるが、その頭は全くの丸坊主に刈られてるんですぜ。勿論公式の場合は前述の如くかづらで覆はれるのではあるが……。

さて、又横道にそれてしまつたが、断髪及口紅同様、緑色の眼隈も頭の悪い現代婦人の発明ではふく、その源を遠く古代埃及に発してゐるのである。

彼女達は、孔雀石（Malachite）を石臼に入れて石杵で碎いた粉末を用ひた。美貌と聰明を、象形文字で讃えられてゐる埃及王朝の王妃テチシエリや、王妃ハツセプトの像を見ると、緑色の冠を戴き、頬と唇とに紅をさし、眉毛から眼尻へかけて眼覚めるばかり鮮かふ緑色が塗られてある。それから……

……かうやたらに書き續けて行くと、私の「美女礼讃」が埃及の婦人の様に無味乾燥ふものにふりさうだ。私は、何も化粧法の厂史を書くつもりでは無かつたんだつけ。

× × ×

眼・口・その次はどうしても鼻って事になるんだが、鼻の話にふると吾々日本人はどうも気が引けてみけふい。

鼻筋がスーツと裏に通ってる私ふんが、今更ながら先祖を怨んでしまう。敢て両親の罪とは云はない。この鼻だけは先祖代々、神世の昔から何千年の間、荷難く受け継いで来た一子相傳の獅子っ鼻ふんだから……。日本婦人は眞正面から見ると、とてシャンでも、横から見ると落膽するし、外人はその反対に正面は醜くとも、横顔は大程整ってるものだ。これも鼻のお蔭らしい。

世の中に絶えて鼻のなかりせば……人の心が長閑かどうが知らないが、兎に角私は葉平朝臣の如く、然して春機発動詩人の如く「花ぶらぬ鼻を怨む」。從って私は余り日本人の鼻に就て云々したくない。

唯、日本人の角張った――どちらかと言へば鋭い顔が、あのちんまりした團子っ鼻故に幾分中和されて、可愛いく見える。「愛嬌のある鼻だ」とさる毛唐が云ふたが、本気か御世辞かそれは兎に角、この一言を身につまされる同感の士に呈して、幾分の気休めにしたい。

処が、その鼻も毛唐だと相当以上に云々し度くなるのだから隨分と勝手ふ私ではある。

一体、外国では額から殆んど一直線に鼻筋の通ったのを、非常に崇高ふ相としてゐる。古代希臘の彫像――殊に神話で名高い神々、ヂュピターの妻へラとか、美の女神アフロディートとか、乃至アポロなんかの大理石像を見ると、直ちに合點けやう。

処が反対に、両眉の間あたりで、ガツクリと段のついた鼻は非常に惨忍ふ相として卑めたものらしい。羅馬を焼き拂ってイリアッドに並ぶ詩作をしやうとした暴君ネロの鼻がこの段鼻の典型的ふものだつたさうな。

大きく彎曲した鷲鼻は猶太の鼻。逆にそり返つたのはグロリア・スワンソンの鼻。恐ろしくちんまりした鼻はカーク・ウッド夫人ライラ・リーのだ。どうも最近の美人系に屬する御婦人方の鼻は皆、このちんまり型であるやうだ。世界に於ける美人産地として有名ふコーカサス系の鼻は、申し分ふく整つては居るが同時に感じが非常に冷い。一体どこでも寒国は、美人を多く産するが、皆感じは冷い。寒さが心臓にまでしみ込んだものだらう。

鼻は口程にものを言ひ――はしない。笑つた眼許がよい。欠伸をした口許が素晴しいと、目・口にはそれ〴〵の表情があるのに、鼻は断然東洋風の無表情を持續しふがら、しかも最も目につく中央部に鎮座まし〳〵て、顔全体の均衡を支配してゐる。それだけに尚更、度し難いのだ。

生れつき、よい鼻を持つものは幸ふり。持たふい奴は、一生の損とあきらめますが？

× × ×

これで大体顔の造作は終つた様だが、最後にどうしても省畧することの出来ふいものは髭だ。

然し、この漢字はそも〳〵いつの時に出来たものか？「[illegible]」と書いて「ゑくぼ」と讀ませる所を見ると、ある時代には"ゑくぼ"を嫌つた頃もあつたのだらうか？

そんな事の詮議はさて置いて、このゑくぼに就てだけは吾々日本人——但し、持つてる方に限るが——大いに外人に対して威張れるわけだ。

といふわけは、吾々日本人には可成りゑくぼを持つてる方が多い様だが、外人にはそれが非常に稀にしか無いからなのだ。殊に、日本婦人が時々持つて居られる針の先で突いた様な可愛いゑくぼに至つては、外人の間では全く見る事が出来ないと申して過言ではあるまい。

試みに、今日の北米映画界に於て、相当以上に名を為してゐる女優連の中を物色して見ても、私の寡聞な故か知らないが、ゑくぼを持つてる名女優を見た事はない。——そんなら、ゑくぼは最早現代女性の先端的媚態の中に数へられないのじやないか——つて？

NO！NO！現在欧洲のウルトラ・モダン・ガール達が殆んど驚異的な讃嘆を放つて珍らしさうに眺め愛するものは、吾等が誇るべき可憐なゑくぼに外ならないのだ。それだけに益々ゑくぼを持つ日本婦人は威張れるわけである。ゑくぼといふ奴は、体質上、西洋の女には出来難いものかも知れない。又、ある一部の耽美主義者に云はせると、このゑくぼなるものは現代美学の反逆者で、今日歓迎されつゝある性格的の強い鋭い美を、弱い可憐な形に崩してしまふために、鈍角的に近代感覚美の見地から余り悦ばれないのださうだ。さう云ふ連中から見ると私なんかも旧時代の遺物に属するかも知れない。

然し、三角、四角の群中にころがる唯一つの眞圓の・・マアー！何んと美しいことよ。

× × ×

ここで話は一足飛びに十八世紀の昔にさかのぼらねばならぬ。

十八世紀は、衰尾期の孔雀の如く美しい時代だつた。が、同時に人々は去勢された牡牛の如く無聊(アンニュイ)に苦しんだ時代だつた。然してその時代の中心こそ、佛蘭西に於けるルイ王朝の宮廷生活——「十八世紀の一千一夜物語」と名付けられた華麗なアンニュイの飛躍史に他ならなかつた。

マダム・ポンパドウールは、こうしたロココ時代にルイ十五世の寵妾として、一世を風靡したのだ。

然し私が何故、突拍子もなくここにポンパドウール夫人なんかを引つ張り出して来たかといふと、私の知れる限りに於て彼女のゑくぼ程素晴しく魅惑的なゑくぼは、史上未だ曽つてなかつたからである。

ゴンクウルの云ふべくんば、彼女の肌は、白百合の如く匂はやかに輝くばかり白く、唇は幾分淡目(うすめ)な紅色(くれなゐいろ)に、瞳は挑発的な黒さに淡(あは)い青を混へ、豊かな明るいルビアで、しかも人を魅するに充分な微笑と歯を持つて居た。そして最後に、どうしても書き落すことの出来ないものは、その両頬にポツチリと刻まれた可憐なゑくぼである……と。

（つゞく）

うだる様な暑さが去つて、燈下親しむべき候となりました。

とにかく好い陽気です。編輯室も活気づいて来ました。皆さんもどし〳〵御投稿下さい。

文藝附録の〆切は毎月二十日。和歌、詩、小説、随筆等。題は随意。

編輯部